

翻刻・日野殿三部抄・綱元問  
弘資答

渡 辺 憲 司

日野殿三部抄は日野弘資が長府藩主毛利綱元並びに一関藩主田村宗永の問いに答える形で作られた、元禄期を代表する堂上歌論である。

書名を日野殿三部抄としたのは、既に入野洋三氏が「和歌大辞典」(明治書院・昭61)で指摘された事に従ったのであるが、同内容の歌論書であるにもかかわらず、日野家三部口傳、日野弘資卿答、野江問答、江阪紀聞、日野弘資卿和歌之答などとばらばらに呼称されている伝本の総括的な書名として適当であると考えたからである。

三部抄とは、第一部、日野弘資が田村宗永の問いに対して答えた「かさゝき」以下四十四条、第二部、弘資が毛利綱元の間に対して答えた「雨の夕くれ」以下三十八条、第三部、六百番哥合の俊成の判詞中「不底幾」とされている詞「御階のきは」以下百十五条についての弘資の言、以上三部から成っている。但しこの三部の順序は各伝本間で異っている。

今回翻刻したのは第二部の毛利綱元との問答部分である。本来ならば一括して翻刻紹介すべきものであるが、大部なものであるた

翻刻・日野殿三部抄・綱元問弘資答

め誌面の都合上不可能である事、また「毛利綱元文芸関係略譜・附後水尾院勅点について」(日本文学研究22号・昭61)と「七石集・翻刻と解説」(地域文化研究所紀要第三号、昭和63年刊行予定)と今回の分を併せて、毛利綱元和歌関係資料をまとめておきたいと考えたためである。

残部については機会を見て順序翻刻紹介したいと考えている。また諸伝本の関係及び成立についても終了の時点で解説を付したく思っているが、前記論文及び「大名と堂上歌壇―田村建頭を中心に―」(『近世堂上和歌論集』昭和63年刊行予定・明治書院・所収)においても触れているので御参照いただければ幸いである。

今回底本としたのは、享保十二年写の内閣文庫本、日野弘資卿和歌之答である。また校合に宮城県立図書館蔵伊達文庫本、日野家三部口伝と東北大学付属図書館蔵狩野文庫本、日野弘資卿答を用いた。  
〔底本書誌〕

内閣文庫(202・54)蔵・一冊本。

外題 日野弘資卿和歌之答。

題簽 原題簽(書き題簽) 菊、桜重ね模様。

表紙 縦27種・横19.5種・大本・素地。

印記 浅草文庫・和学講談所。

丁数 墨付全107丁、遊紙2丁。

(第一部23丁・第二部26丁・第三部68丁)

内題

第一部 坂上宗永問書日野弘資卿答

第二部 なし

第三部 六百番歌合

識語・奥書

第二部の卷末に

奥私云

右此一帖者 大江氏綱元不審之條々被尋候処 特進前献納

弘資卿返答之趣也 大江氏之外所持之輩不過一兩口尤深密

箱底不可及于他見作者也

第三部の卷末に

右此三部抄者日野殿弘資卿秘鈔也 意趣者坂上宗永大江綱

元依懇深之問而答此之秘説也 門流之外不可免外見者也

仍證之訖 享保十二年秋八月中旬書寫訖

〔凡例〕

一本文の行移りには従わない。但し歌のあとなど意味のある改行には従った。

一本文の濁点の有無は底本通りとしたが、読解の便宜のため適宜

一字明けた。

一仮名は現行の字体に統一した。

一片仮名の送り仮名及びハ・ミは平仮名に改めた。

一漢字は原則として通行の字体を用いた。

一特殊な略体及び合字は現行の字体に改めた。

一校合には( )及びへゝの記号を用いた。

( )は狩野文庫本、へゝは伊達文庫本における記載である。

底本と異った箇所には圈点を付して( )及びへゝ内に記し、

又底本の脱文・脱字は補なう形で( )及びへゝに記し、又底

本にあって校合本にない場合は(ナシ)又は(ナシ)と記した。

例、月と(は)花と(ナシ)雪(と)へは)。

底本↓月と花と雪。狩野文庫本↓月は花と雪と。伊達文庫本↓

月と花雪は。

目録

一雨の夕くれ

一見ゆる明ほの

一身をいかにせん

一花さりかも

一たへぬ

一谷こし 峯こし

一しろき

一玉のを柳

一み山への里 付 吹あらしかな

一さなきたに

一こもる

一紅葉しにけり

一ひちて

一あたり夜

一ねるやねりそ

一川かねを

一雪のうはき 付 雪のうはよき

一松ふきすます

一今朝の雪かな

一きえそしにける

一なた舟 付 つづくしはちを

一河やしる

一本哥の事

一社頭神祇之事

一立春早春之事

一寄月 月前之事

一野外 江上等の事

一海辺浦の事

一朝霜

一寄木窓

一旅窓

一春曙

一卯花

一螢

一蓮

一霜

一残雪

一片思

(一御詠)

一雨の夕くれ

詠歌一(体)に此頃人のよみいたしたらんこと葉さらくよむへからすと有之詞の中に候 其哥の詞心おほえに点をかけたるを小点と申候て用捨いたす事に候 後京極撰政殿(ナシ)うちしめりあやめそかほる(郭公なくや五月の雨の夕くれ) 新古今に入候如此人の心をとくめてよみ出したる詞をうらやみて我力をもいれすよみ申事 先達之(被)制候事に(ヘナシ)候 かすみかねたるうつるもくもるきのふの雲の(あとの山風)なと四十余首被書出(遣)候 奥にケ様の詞はぬしある詞なればよむへからす 古哥なりとも人の独詠(し)いたして我詞と持たるをはとらすと申めり 桜ちる木の下風ほのくとかあしの浦なとのやうあること葉むかしの歌なればとてとる事ひか事なるへしといましめたれば必しも此哥に限るへからす 一首のせんにてあらん詞をはゆめくおもひよへとるへからすと有之 詠哥一体為家卿作に候

翻刻・日野殿三部抄・綱元問弘賢答

一見ゆる明ほの

此詞先達被難候哉 不埒勘候読方なとに候は、被書付御越可有之候 あけほの、春は先達被加難候 此詞覚え申さす候 一身をいかにせん

此詞は常におほく候 あしき詞のやうにも見え申さす候 哥合の中いつれの哥に候哉 難なと候哉 常に多之候(く)へく耳なれ候詞に候 読(統)後撰雑上曾祢好忠 あさみとり山はかすみにうつもれて有かなきか身をいかにせん 金葉恋上少(ナシ)将公教母 たなはたは又こむ秋もたのむなるあふよもしらぬ身をいかにせん 新勅撰恋二権中納言長方 いせのうみ(ら)におふのうらみをかさねつゝあふ事なしの身をいかにせん 如此ふるくもちかくも多之詞に候 當時も可詠候 但句のつゝきによりよくもいかゝにも可有之候句作于要に候

一花さかりかも

風雅(集) 匡房卿 白雲の八重たつ峯と見えつるはたかまの花さかりかも 其外ふるくもちかくも常に聞なれ申候 當時も可詠詞に候 毎度申候ことくそれも句つゝきにより可申候 一たへぬ

不堪に候 たへかたき心に候 絶ぬにては無之候 絶ぬの時は仮名たえぬと書申候 如此の(ナシ)へ(ナシ)事は申に及(候)へ(候)はす候へとも毎度仮名の相違にて哥心得かたく候ゆへ申候 後撰恋四敦忠朝臣 けふそへにくれさらめやはとおもへともたへぬは人の心なりけり 金葉恋下民部卿忠教 恋わひてたへぬおもひのけふりもやむなしき空の雲となるらん 千載集恋部中院右大臣 つゝめとも

たへぬ思ひに成ぬれはとはすかたりのせまほしきかな 新後撰秋上  
入道前太政大臣 吹風にたへぬ草葉の露よりも秋の心をき所な  
き 玉葉秋下源家清 くれかたの秋さり衣ぬきをうすみたへぬ夜寒  
に今そうつ也 如此多也 詠来候當時も毎度よみ申詞に候  
一谷こし 峯こし

万葉に朝日かけにほへる山に照月のあかさるいもを山こしにをきて  
と候也(歎)へか 谷こし峯こし多(く)聞なれさる詞に(ナシ)候  
但新撰六帖藤のうた 知家 たにこしの藤のふるえのひこはへ  
てしなひもなかく花さきにけり 柚 光俊 峯こしの谷の柿木のつ  
なよはみななしてすてし名こそおしけれ 橋 行家 峯こしのたに  
、(も)かけつゝ丸木橋まろのみよはき道そまされる 右一両首見  
え候然(し)るへき詞と(に)も聞えず候 只人毎によみならはせ  
る詞よろしく候 めつらしき詞は用捨可有之事に候

一しろき

井蛙抄云 浪かく(へ)るむこの浦かせ音さえてあは鳴しるく雪そ  
つもれる 民部卿云 しろきと申詞又亡父申旨候き 順徳院御百首  
駒とめてしははゆかし八橋のくもてにしろき今朝のあは雪 京極  
黄門云 八橋の事説に多く候へとも古哥にも詠采り候 近年しろき  
と申(候)候詞あしかるへき事には候はねとも(ナシ) 未生初学  
每人每首詠候故にあまりに満耳之(て)厭布之(却て)思候 八雲  
御抄云定家 白きあをき吹嵐かなあらし吹也 にてのみ待るといふ  
も詞のわろきにはあらし 人毎に好むをにくむ也 頼阿私云家持卿  
しろきをみれば夜そ更にける 秀哥本体にて待れば詞のわろきにて  
は有へからす優なるにつきて人ごとに好よみけるなるへし 所謂御

製の杉のは白きあふ(坂の関) 式子内親王の初雪白し(岡のへの  
松) 慈鎮和尚わか山のはに雪しろし 家隆の雲るに白きみねのか  
け(はし) これらを初て其頃さほひよみけるほとににくまれける  
にや 殊に御製のあらし(に)も白き春の曙殊勝之(候) 間向後可  
為無甚不可詠之由 和歌所にて沙汰有けるとそ申されし(候) 此  
字堅可謹慎者歎 千五百番哥合顯頭 ちりまかふ花を雪かと思見るか  
らに風さへしろき春の曙 左哥風さへ白き春の曙といへる下句よろ  
しくこそ待れ 秀能のすゝめの五首に定家 天つかせ初雪しろしか  
さゝきのわたせるはしの有明の空 正治二年九月院御哥合曉雪 明  
ぬるか木すゑ折ふす松かねのもとより白き雪の山の端 井蛙抄右之  
通に候よく聞え候 此定家両首の中も白きの詞あしからさるよしと  
見え候

一玉のを柳

井蛙抄 西行御裳濯河哥合 山かつのかた岡かけてしむるのゝさか  
ひにたてる玉のを柳 左の哥さることありと見る心地(は)してめ  
つらしきさま也 末の句のをの字やすこしいかゝさもよみて待るか  
とよと云々 八雲御抄 柳の所に玉柳玉のを柳被載之候 俊成卿さ  
もよみて待るかともと被申候もあしき詞と有にては無之候 玉のを  
柳とよみたる作例も候やとの事と聞え候 八雲御抄にも被載候へは  
當時もくるしかるましく候也(歎)候

一み山への里 ふくあらしかな

井蛙抄中勢卿親王 聞なれぬ松のあらしもかねてよりおもひしまゝ  
のみ山への(里) 民部卿云み山への(里) ふくあらし哉 不可詠  
由亡父體に(ナシ)候(ナシ)申き随分加制止候 詠哥一体先達加難

詞之中吹嵐哉へなかくよむ 小山への里へなかくよむ と有之 先達堅被加制  
止候詞に候へは當時も憚之申事に候 一さなきたに

常に聞なれ候詞に候 さらてたに是又同じことと聞え候 其内さら  
てたには多之候歟 さなきたにはちといかゝときこえ候 さなきた  
にはさやうになきたにのころと聞え候 さらてたにはさあらてた  
にに候へと おなし詞のうちさらてたに聞よく候歟 猶哥により  
申へき事に候 一こもる

千五百番(哥合)に寂蓮 暁の鳴の(ナシ)へ(ナシ) たつまでもな  
かりけりいなはにこもる宿の夕くれ 定家判云 いなはにこもると  
いへる霞外花色霧中鹿声若草のつまおやのかふこならてはことほり  
ならずや きこえ待らんと有之 むさしのはけふはなやきそ(わか  
草のつまもこもれり我もこもれり) たらちねのおやのかふこのま  
ゆこもりいふせくもあるかにもあはずて かすみかは花鶯にとち  
られて春にこもれる宿のあけほの いづれもふるくよみ来れる詞に  
候 當時も毎度よみ申候事に候 但いなはにこもる定家卿被難候趣  
尤に候歟 哥により(句)作により可申事に候

一紅葉しにけり  
井蛙抄民部卿宝治百首時中納言為經卿詠内候被見合之時 ふるく申  
たる事は候はねとも愚意にはしめて可斟酌之由被注付候云々 詠哥  
一体先達加難詞之中 もみちしにけりもみちにかきるへからすと有  
之 私詠哥一体も民部卿入道融覺作候歟 はしめてと宝治百首の時  
被申由に候 それより以前は不憚詞と聞え候 千載集に覚盛法師 秋

翻刻・日野殿三部抄・綱元問弘資答

といへはいは田の小野の柞原しくれもまたて紅葉しにけり 同集賀  
茂成保 吹みたる柞か原をみわたせは色なき風ももみちしにけり  
如此候もみちしにけり死にけりと聞ゆるを被憚と見え候 俊成定家  
なとは其沙汰無之候 宝治百首之時為家初て心をつけられたると聞  
え候 か様の事は先達の心之(得) 不同候 されとも為家被難之  
由井蛙抄にも頼阿被書載候へは先は用捨(に)も可有之候歟 哥に  
よりてちかき哥にも可有之様にも候 猶かやうの事は静に哥あまた  
勸見申度事に候 一ひちて

井蛙抄に僻案抄云 ひちてとはひたしてといふ心也 此詞昔の人は  
好よみけるにや古今にはおほくみゆ 後撰にはすくなし いまの世  
の哥によむへからすとそいましめられしと有之 古今集春上紀貫之  
袖ひちてむすひし水のこほれるを(春たつけふの風やとくらん) 同  
集夏よみ人しらす こゑはして涙は見えぬほととぎす(わか衣手の  
ひつをからなん) 同集秋上源宗千朝臣 今はとてわかるゝ時は天  
河(わたらぬさきに袖そひちぬる) 同恋三紀貫之 夢ちにもつゆ  
やをくらん夜もすからかよへる袖の(ひちてかかはぬ) 同恋三業  
平朝臣 秋のに篠わけし朝の袖よりも(あはてこしよそひちま  
りける) 後撰集恋五よみ人しらす いさや又人の心もしら露のを  
くにもにも袖のみそひつ 同雜二読人しらす むさし野は袖ひつ  
はかりわけしかとわか紫はたつねわひにき 同雜三よみ人しらす  
滝つせにたれ白玉をみたりけむひろふとせしに袖はひちにき 右之  
外猶候哉可被勸候 先所見之分に候 ひちての詞俊成卿庭訓之趣定  
家卿僻案抄に被載候 以後不詠事に候 自然近代の哥に候とも斟酌

可然候

一あたり夜

後撰集信明朝臣 あたりよの月と花と(ナシ)を(同じくはあはれしれらん人にみせはや) 新勅撰集殿富門院大夫 たれとなくとはぬそつらき梅花あたらしにほひをひとりななめて 玉葉集(に) 西行法師 はなみにとむれつゝ人のくるのみそあたりさくらのとかには有ける あたりはおしきといふ心に候 井蛙抄にあたり夜 千五百番哥合左大臣良経公 あけはてはこひしかるへき名残かな花のかけもるあたりよの月 内大臣通親公 わひ人のすむとはきけと足引の山のかひある岩つゝしかな 左花のかけもるあたりよの月まことに名残おほく侍るへき事也 右山のかひある岩つゝしかなおかしくは侍るへきをわひ人のすむとはきけとゝいへるころ 管見の老已不覚悟侍り 其間暫も左まさるへきにやと可申侍處極以難其恐多あたりよの詞雖為旧艶事強不可庶幾所存侍る也 仍持とすへく侍るにや如此申状尚恐惶云々 八雲御抄云あたりよといふは万葉集(ナシ) (ナシ)には新世といへりそれにあたりす夜也 風情なくあたり夜也と云々 詠歌一体先達加難詞之中にもあたりよ被載之 但あたり夜を被難候子細とくと不知義候へとも夜を世と聞まかへては如何と有之事にやと憚候歎 尤先達被加難詞に候間 先は當時も斟酌可有之候歎 又ちかき哥にも自然は見え候やうに候 詞のつゝき儘に夜と聞え候はゝくるしかるましく候歎 猶近代先達の詠勸候て可申候一ねるやねりそ

拾遺集恋二躬恒かの岡に萩かるをのこなわをなみ(ねるやねりそのくたけてそ思ふ) 井蛙抄に僻案抄云 ねるやねりそ(と) はなに

を申かと尋申しかは問はざる哥よまむとおもふかとかめられ侍き 萩かるをのこのゆふへき繩のなれば枯たる枝をねちよりていはんとするよしか 此哥まねひよむへからすとそ侍しにて(云々) (云々) 俊成卿に定家尋られし答右のよしに候 仍て(ナシ)堅不詠事に候

一つかねを

古今集恋一誦人不知 あはれてふことたになくは何をかはこのみたれのつかねをにせん 此外覚申さるやうに候當時の哥には如何に候歎 井蛙抄(云) 衣笠内府御哥の時(内) 京極黄門 東緒雖古今哥詞(詩) 頗無品物に候云々

一雪のうはき 雪のうはふき

右の詞いづれも覚え申さず候 雪のうはきは衣に雪のふりかゝりたる事に候や 雪のうはふきは屋上に降つもりたるを申にやと聞え候 古哥覚不申候 近代の哥などにも候はゝ書付可被差越候 一首にて其心きこえ申へく候 當時の哥には好ましからす聞え候 たゝ哥はみたて趣向もむかしよりありふれ候事をいさゝか風情をかへてあたりしく聞ゆるやうにとりなす事に候 雪のうはき雪のうはふきなどは初て詠申候 一首はめつらしくも可有之候 其以後は事ふり申へく候 いつもの事をとりなしに(候)てあたりしくしたて候事に候 さやうの所にて哥はむつかしく候 雪のうはき雪のうはふきなどはめつらしきに似てみたてはかりに候 花のうはきと申哥も候やうに覚候 たゝ今忘却かさねて可申候

一松ふきすす

廣田社哥(倉) 社頭雪前齋宮大輔 しめの内の松ふきすす風の音

もむもるはかりにふれるしら雪 右従三位平経盛 白雪はとたえも  
見えすふりにけりいつこなるらんあけの玉垣 判云左松ふきすす  
といひむもるはかりになとよめるけしきふかくおもへる事とは見え  
侍り 右とたえも見えす降にけりといへる詞所の名をひける心にと  
りて又以右為勝 松ふきすすは松風のこゑのすめるよしにやと聞  
え候 判者俊成卿猶あまりなる詞にやあらんと申され候へはよろし  
からさるよしと聞え候 当時の哥などにはなをしかるへからす候歟  
一今朝の雪かな 雪みては

同哥合 社頭雪左資隆 祝子かいはふ榊のしらゆふにしてかけそふ  
るけさの雪かな 右平経正 雪みては神もさこそはおもふらんあと  
ふみつけしみつひのひろまへ 俊成卿判云へに 左のしてかけそふ  
るといひ右の神もさこそはなといへる心いつれも興ありて見え侍る  
を 左の今朝の雪かな右の雪みてはなと侍る程なをすこしおもふへ  
くやとも聞え侍れば持と申へしと云々 けさの雪かな雪みては誠に  
風情なく聞え候 なをすこし何とそ可有之との心と聞え候 けさの  
雪かなは上の句のつくりにより只今の哥にもくろしからぬ事も可有  
之候 雪みてはあまりたゝ詞のやうに平懐によるしからす聞え候  
一きえそしにける

同哥合海上眺望左季廣 鳴かくれ見えみみえすみ行船のはては雲の  
にきえそしにける 判云左哥すかた心は優に侍り未句のことはつゝ  
きそいかにそや さらてもときこえ侍りと有之 末句きえそしにけ  
るをいかにそやと申さるゝに候 前にも紅葉しにけりなとを被難  
(候) 心と聞え候 其うへきえそしにけるいますすこし可有之所のや  
うに聞え候 彼是不甘心とみえ候

一なた舟(の) つゝくしほちを

同哥合海上眺望 左懐綱 詠てし天津雲のはなた舟のこき行ききに  
有ける物を 右祐盛 白雲につゝく塩ちをなかもれはいつれを浪と  
えこそみわかぬ 判云左右いつれもよろしき哥とは見えなから右は  
あまた見え侍る雲となみにたまつはれて思ひ分かく侍るうへにつ  
ゝく塩ち(を) といへる聞よくもあらぬにや 左はなた舟又いうに  
しもあらねとなかめこし天津雲のはなといへるこゝろよろしく見え  
侍れば左のかちと申侍りぬと有之 なたふねつゝく塩ちまことに聞  
よろしからす候

一同哥合海上眺望左季定 漕はなれしほちをゆけはあはち嶋かくる  
ゝまてとなかめつるかな 判云左哥すかたはよろしく見え侍るを下  
句や彼かくるゝまてもかへり見しはやといへる名哥の目出侍れはい  
かゝと聞え侍る也 哥は古哥一二句とるは常のことなれと桜ちるな  
とをく事ははゝかるへく侍る也と有之 いかにもかくるゝまてもか  
へり見しはやと申名哥候へは可憚事に候 ほのゝとあかしのうら  
桜ちるこの下かせ月やあらぬ春やむかし(の) など雖二句更不可詠  
之由 定家卿被誠のたくひ多か(た) るへく候 堅可憚事に候

一井蛙抄(に) へに 一字秀句声のたかひたる事 中務卿(親王)  
御詠(云) 雲のある遠山とりのをそ桜心なかくものこるはなかな  
民部卿入道云すかた詞珍重に(ナシ) へナシ) 候 但山鳥尾と存  
候 緒非本意候 山鳥の緒たえのはしに鏡かけななきよわたる秋の  
月かけ 山鳥のおの事以前に申上候是又すかた詞たくみに候歟 を  
は上声おは去声に候 仍てへナシ) 申されたと見え候 如此うへ  
は一字の秀句 声を吟味可有之事に候 いきの松原(も) 生田の杜

は右に申候  
一河やしる

六百番哥合難陳判詞に なかくと候へとも落着無之由(ナシ)へナシ)袖中抄和哥色葉などにもさまの説を被載候 され共いかやうの事と決かたく候 新古今神祇部延喜御時屏風に夏神樂の心をよみ侍ける 貫之川社しのおりはへほす衣いかにほせばか七日ひきらん 又貫之家集にうちの御屏風のれうのうた廿八首と有之の中に夏かくらゆく水の上にはへる川社川浪たかくあそふなるかな 右のことくに候へは夏神樂と申事候にやとはかり心え申事に候 俊頼無名抄に川社の事いかにもしれる人なし 只をしはかりなめりと有之 清輔奥義抄にも川社の事さまに申めれともみな僻事也と(ナシ)云々 清輔俊頼など時分にさへしれる人なし 皆ひか事也 候へは其以後たしかにはしれずと見え候 貫之哥の詞書に候へは先夏かくらと申事と心得候までにて、(候) 近代の哥にはみなしのにをりはへほす衣の哥を本哥にてよめる事(斗)に候 川社の体いかやうの事とまてはさた無之候 しのにおりはへの哥を本哥にて事足申事に候  
一本哥の事  
本哥は後拾遺などまての哥 堀川院へナシ)百首之作者之詠を取へき由に候 彼百首之(ナシ)へナシ)作者も人の口にある名哥などのそれとおほゆるをとるへきにや 證哥には近世の先達の哥も引用へきよし頼阿注を愚問賢注にも候歟 八雲御抄に(云) 古哥を取事は第一の大事也 上手殊にみゆる事也 しかあれと又いと上手ならぬ人もふる哥よくとるもあり 上手の中(内)へ内)にもふる哥え

とらぬ人もあり 此中二のやう有(に候) 一には詞をとりて心をかへ一に、へナシ)は心なからとりて物をかへたるもあり 詞をとりて風情をかへたるはよし 風情をとる事は尤みくるしき(ナシ)へナシ)と云々 同御抄に古哥に衣たに中に有しはといへるを 後撰哥につらからぬ中に有こそうとしといへると(と)れか(る) たくひかすしらす 上古かくのことし 中頃哥とる事まれ也 近代は又多し その中にもわざとめかしく耳にたちて これを取たるはかりをせんにてわか心も詞もなき かへすかへす此道の魔也 尤このむへからず 近代俊頼か哥などはやうとる事になりたるにや それも猶ちかき哥をとるに似たり 哥をとらんに猶ふるき哥をとるへき也 東三条左大臣の折てかさゝん老(の)かくるやといへるを 躬恒か老(母) もかくれぬ此春はとよめるすこしちかき世のためし也 朝忠はこゑなかりせば雪消ぬとよめるは谷よりいつるこゑなくはといへるをさなからとれり されとこれは哥(を)とるさほうには、へナシ)あらず 自然にかよへるか凡ふるき哥をとる事哥にまめなる人の所為なり まことに一の事なれと我とめつらしうよみたらんには猶をとるへくやと云々 如此に候へとも俊頼哥などは又只今は世も隔り申候ゆへ 毎度本哥にとり申事に候 俊成定家などの時代の哥は本哥に用かたく候 それも其人の事により興行の会などには其人の詠を本哥にてよみ申事も候(ナシ)それはあいさつにてくるしからず候 常の題の哥などには崇徳院の御代天治大治などより以来の哥をはとり申さす候 作例にはそれより以後の先達の哥をも證哥に用事に候  
一社頭神祇(之)へ(の)事



社頭と申題には男山三笠山など神社を詠申候歟 又は神垣あけの玉垣神のひろまへみつかきなどはかりも詠申事に候 神祇は神徳をあふき申事を詠候 是も神祇には社頭をさしても詠候 社頭と申題に神祇の心はかりにて社頭のさた無之はいかゝに候 仏寺釈教同前に候

一立春早春之事

立春は臘月盡て春立ける日に候 早春は春のはしめに候 立秋早秋同前に候

一寄月 同前之事

寄月は月によそへて申事に候 尤月に対してなりとも又は月をみすとも月の事を申候 寄月と申題に月の(ナシ)前の心は相違無之候 月前と申題に寄月の心にて月のうわさはかりにては違申候 月前は月に対してに候

一野外 江上等の事

鴨長明無名抄に 暁天落花雲間郭公海上月 これらのこときは第二の文字必しもよます皆しもの題をよむに具して聞ゆる文字也と有之 野外も此類たるべく候 野外江上などの事いつれの詠方の書にて候や 見(申)たるやうに候へとも右にてよく聞え候ゆへ不勸(申)候 野外江上等の外上之字かならず詠申事無之候

一海辺浦之事

海辺と申題には浦にても浜にても磯沖なきさ只わたの原わたつうみなと詠之(ナシ)候 浦と候題には浦の字必詠之候 名所にても又(は)浦風浦なみなとはかりも詠申事(に)候 浦の字なごは如何に候 一三井寺新羅社哥合 談合友恋右長照 隔てなくなけきあはするか

ひありて君にあふへき恋ちをしへに 俊成卿判云 大かた恋のうたに君とよむ事はその人にすかひ其人にをそるゝ時よむなるへし他人に談する時君の字頗荒涼なるにやと有之 其人にすかひ源氏物語乙女(の)へ(の)巻に候歟 さいはひ人のきさきかねこそおも(ナシ) ひすかひぬれと有之 相並心と見え候へとも此判詞にては人に對しての心のやうに聞候 人にをそるゝ時とはおほけなき人などに心をかけてたるにても候へき歟 それも艶書贈答などの哥たるべく候 六百番哥合には君とよまれ候哥多之候へとも君の字の(ナシ)へ(ナシ)きた無之候 此哥合も判者(に) 俊成卿之由(に)へ(に)候

所持申さす候ゆへ勘見申さす候 此哥合より君の字沙汰いてき候物と見え候 当時恋哥に君とよみ申事無之候 艶書贈答などは各別の事に候 贈答は恋にあらす候ても餞別朋友のかたへ音信つかはし候にても さきの人をさして君と申遣候(ナシ)へ(ナシ)事常の事に候 ふるき哥には多之候 六百番哥合の頃まで其沙汰無之見え候 当時は右に申ことく恋の類の哥に君と(は)よみ申さす候 艶書贈答餞別等には各別の事(に候)へ(に候)右に申候 御詠

朝霜、(霞)

今朝はまたわたりし駒のあともなくをく霜白きまへのたな橋

白き書きの事右に申候 其時人毎に好み詠するゆへに(ナシ)

へ(ナシ)不甘心さたと見え候 しろきあをきに限らず近代も功者のよくとりなしよめる哥の詞の一ふし有之をうらやみても人も其詞を必ずよみ入申事耳なれ宜しからす候 当時も多候(之)へ(之)事に候 いつれの詞も人毎のやうになり候へは聞にくき物

に候 白き青き詞のあしきには無之候 只今は自然に詠申事に  
候 右にくはしく申入候

寄木恋

あふ事はなみたの露のたま櫛やちよもまたて袖くたせとや  
くたせとやは袖を朽させよとやに候

旅恋

旅枕やとはかはれとおもひねの夢路をくれぬ人のおもかけ  
人のおも影はおもふ人の面かけに候 旅行日数をかさね故郷遠境  
をへたつれとも恋しくおもふ人のおも影は夢路をくれすしたひ来  
ぬるよしにも聞え可申敷 恋の題君の字への事右に申候

春曙

幾たひかなかめなれてもいひしらす心にふりぬへのころ春の曙  
心に残る六百番哥合信定哥ころにのこれはるのあけほの等類と  
申はかりにも無之候 六百番哥合信定哥(は)おもひいては同じ  
なかめにかへるまで心にのこれしの(ナシ)へナシ春の明ほの  
候 只今如此なる景氣を後日にも思出ならば只今にかはらす 同  
し景氣の立かへるはかり心に残りておもひいつることに景氣う  
かひ(み)て今見るやうにあらまほしき由の心さうに候 御詠は  
幾度なかめ(なれ)られ候てもいひしらすおもしき曙の景之由  
と承候に付 なかめなれらるゝにしたらかひてなをめつらしきやう  
に候て可然哉と心にふりぬと加懸墨申候 のことと候ては幾度か  
なかめなれても候所に相応申さす候やうに候 心にふりせぬけ  
いきにも有哉と興せられ候方可然候敷 其上六百番信定心に残  
れ春の(曙)もころはかはり候へとも一字の違はかりにてむつ

かしく可有之候 撰集の外に候ても所見無之 哥は等類可有之か  
と被尋候事もなりかたく候 撰集の内にも撰集の外にても人の  
よく覚え申候 哥の一かともへ候句をば用捨任事に候

卯花

みすてはあなうの花に手折つる袖にはきえぬ里のしら雪  
古今に世中をいとふ山への草木とやあなうの花の色にいてけん  
そのちの哥にもあまり見え申さす候 近代の哥などには有之事  
もあるへく候 卯の花をあなうの花とつゞけり(ら)へられ  
候 古今集へナシの哥に候へはあしきには無之候 右にも申候  
(ナシ)へナシことく詞は哥により申事に候 又三代集の詞も  
当時相応の詞と只今の哥にはいかと聞え申詞候 左様の所に心  
を付られ候肝要に候

螢

明ぬればきゆる物とはしるやいかにもえてみしかき夜半の螢火  
ほたる火聞なれ申さぬやうに候 伊勢物語にこのほたるのともす  
火にや(みゆらん)などとは候へとも螢火と聞なれす候 たとひ  
有之候とも稀たるへく候 詞もよろしからす聞え申候 此御詠明  
ぬればきゆる物とは道信朝臣明ぬれば暮物とはしりになから  
(猶うらめしき朝ほらけ)哉之句法に候 古哥の句法をうつし申  
事は好まざる事に候 自然にふるき哥の句法に似申たるはくるし  
からす候 是又序ながら申候

蓮

にこり江の心へたつるはちすはにうらやましくもをけるしら露  
四季の題に釈教述懐無常など詠し候は常の事に候 恋の心は如何

に候 ふるき哥に候へとも近代は四季の題に恋は不見申候 此御  
詠詞不定に候 趣向分明ならざるやうに候

霜

霜むすふ秋みし草のすゑの露もとの雫のおもかはりして

末のつゆもとの雫や(ナシ) 哀傷の哥に候と申事にては無之候

初句結句なとも何とそ可有之様(へ程)に候 末の(雫)本の(雫)

おもしろき詞に候ゆへよくとり合申たる題にてわさとなく趣向に

呼出されたる可然聞え候 古哥をとり候事のむつかしきと申候は

ケ様の所にて、(ナシ)へ(ナシ)候 惣ていつれの哥も花ならば花

月ならば月霜雪等にいたりて其趣の景氣を第一に思案之中似合し

き古哥にても又へは古詩古語などにも思案にひかれ(て)

へてふと出来り候を取合候へはよく聞え申事に候 不願僻存御  
心安申入候

残雪

春としもまたしら雪のきえ残る日影や冬のかたみなるらん

四季の哥春のはしめの哥に形見と申事憚申候にあらす候 春とも

しらす空さむき日影に消のこる雪こそ冬のかたみにはあれとの御

事候哉 それを日かけや冬のかたみなるらんとはちとむつかしく

候 句作何とそ可有之候

片思

おもふその君かへたつる中川は名のみなかれてあふよしもなし

初句よろしからすふと出申たるやうに候 二への句君の字如何

に候 うへへたつる中とはよくつゝき候 河の縁はすくなく候

歟 隔つてても可有之候へとも川に候へはふかきあさきなど常

の事に候 但しあひもおもはぬ中川なとも有度(處)候 猶初  
句の取あひむつかしく候歟 いろくゝにこゝもとにて初句ををき  
候て見申候へとも不宜候ゆへさしをき申候 哥は一句にてても心  
つけ申(ナシ)へ(ナシ)さす(せ)候へは首尾しかたき物に候  
あしからぬ詞もつゝきによりいかゝと聞えよろしからざる句もつ  
ゝきからよく聞え申事に候 さや(う)へうの所肝心に候 御  
不審之事とも愚存申入候 堅外見無之様にと存候

追記

本稿を成すにあたり、内閣文庫、宮城県立図書館、東北大学附属  
図書館に御配慮を頂きました。また今井源衛先生にも御教示を得ま  
した。付記してあつく御礼申し上げます。